

昭和拾五年十二月

會

報

VIII

京都帝國大學文學部

地理學談話會

目次

一、談話會報告	一
二、教室より	四
三、會員消息	六
四、會計報告	六
五、おことわり	七

一、談話會報告

例會

○昭和十四年十二月九日(土)午後一時半 於實習室、

出席者 (二十一名)

一、延長風土記に就て

(要旨)

和銅の風土記は延長の太政官符によつて延長年間再び撰進せしめられたと一般に言はれてゐるが、右の官符は中央に於て失はれた風土記の原文を諸國に求められたと見るべきで、新たな撰著が行はれたとは考へ難い。而して延長に於る風土記の探求は、實は延喜式編纂の爲の資料を蒐集すべく行はれたものであることが、他の官符等によつて判明する。

一、本陣に就て

(要旨)

和田 篤 憲

○昭和十五年二月十日(土)午後一時五十分 於實習室

出席者 (二十一名)

一、航空輸送の地理學的研究 川上 喜代 四
二、清時代の支那地圖——概觀並びに諸問題——

兩君とも卒業論文の要旨發表であつた。

三上 正 利

○昭和十五年五月十一日(土)午後二時半 於實習室

出席者 (二十六名)

一、新井白石の地理的知識

西田 和 夫

(要旨)

本邦に於ける世界地理に就いての知識の發展は、近世に於て最も著しく、從つて又、その研究は興味が多い。而もその發端は、東西兩洋人の交通に依つて開かれたのである。

かくて近世中期に入り、新井白石出るに及んで、萬國地誌の著あらしめるに至つた。「采覽異言」(正徳三年序、西曆一七一三年)がそれである。尤もその先驅としては、西川如見・和漢三才圖會などがあるけれども、未だ其體を得ず、且又、精確なものではなかつた。邦人の世界的觀念の進展は、白石に於て、一躍數段の進歩を遂げたのである。蓋し白石は、自己の天才と其公職とを利用し、偶然の一事件によつて、この大事業を成就したものである。偶然の一事件とは他なし。ヨラン・シローテ等尋問の事それである。更に、官廳所藏のヨハン・ブラーの地圖や(こゝに彼の「西洋紀聞」が出来た)、利瑪竇の「坤輿萬國全圖」も、實に貴重な資料であつた。

「采覽異言」の内容は、輿地總叙に始まり、漢文を以て世界を五大洲別に叙するものである。而して國數八十餘を擧げてゐるけれども、その内には屬邦或は小殖民地などあり、又、その悉くを擧げてゐない。雜然として統括を缺いてゐる様であるけれども、材料の少い當時にあつて、而も、大體に於て正しく世界を叙する事

の出来たのは、何といつても白石の偉大なる所以であり、また吾人が、白石を稱して地理學の始祖とする所以でもある。

白石の「異言」の後約百年して、山村昌永によつて増訂版が出版せられた(享和二年序、西曆一八〇二年)。これを以て見るも、白石が本邦人の世界地理的知識に貢獻した功績は大きい。一面に於て、歴史學者並に言語學者の嚆矢であつた白石は、また實に、地理學者の嚆矢でもあつたのである。

一、英吉利國民性の民族的基礎

朝 永陽二 郎

(要 旨)

國民性は環境の影響に依て、必しも不變ではないやうである。然し、その奥底には尙ほ祖先の性質を潜め、それが時に表面に現はれるやうに思はれる。ところで、大抵の國民は幾つかの人種民族の結合から成立し、國民性はそれ等の諸人種民族の性質の融合によつて表現せられるであらう。こゝに國民性の民族的基礎が考へられる。

英國民も幾つかの人種民族から構成され、それ等の諸人種民族が會て如何なる性質を有つて居たかを見ると、ケルト民族は多分に藝術的才能と智的順應性とをもつて居たが、一方では非常に殘酷であつた。次にシュート・アングル・サクソンも殘忍狂暴な性格で、同盟するにも戰爭するにも自分一個の利益と調和せしめて行つた。然し一方では詩情を解する心をもつて居り、立派な古詩を残したが、それは矢張り陰慘の氣が強いものである。又、彼等は殘酷ではあつたが仲間に対しては誠實で、輕佻に流れない眞面

目きを有つてゐた。次にデーン人は殘酷ではあつたが、鬭爭の爲めの鬭爭は好まず、武力の代りに計略を用ひる事が出来る時には喜んでこれを用ひた。次にノルマンは尊大で精力的な性格であつた。尙ほ又、英吉利にはインクロージヤ(圍ひ)の意味を現はす語尾や語根をもつ地名がアングロ・サクソン系のものにも、ケルト系のものにも多いが、これは隔離を好み、又自己の物を固く所有せんと欲する彼等の性格の現はれであると言はれてゐる。

以上が現在の英吉利國民を構成した諸民族の性質であり、現在の英吉利國民性にかゝる民族の性質の基礎の上に立つてゐる。勿論、此等の性質は過去の文化の低い時代の、又彼等が英吉利島を占據した當座の性質であるから、其後の地理的、社會的、文化的環境によつてその性質に變化があつた事は認めねばならないであらう。然し尙ほ、現在、英吉利國民性と稱せられる種々の性格の中に、又過去から現在を通じての英吉利の對外行動の中に、此等祖先の性質をみるやうに覺えるのである。

○昭和十五年六月七日(金)午後三時半 於實習室

出席者 (廿四名)

一、猶太民族の特徴

岡 本 信 太 郎

猶太民族の多くの特徴の中、ここでは猶太人の風采、體格、日常生活、種々の習慣及性格、才能の一端を述べたいと思ふ。

本来猶太人は Semite 種族であり、後、混血、社會的、經濟的等の諸原因に依り、彼等のタイプ、體格に種々の型を生じたが、現在常識的に猶太人を見分ける特徴として、何處か不公平に偉大

な所即ち大きな眼、口、顴鼻、偉大な顎、鋭い顎、又首、手首等に盛り上つた肉付等を擧げる事が出来る、日常生活は宗教上の戒律、彼等固有の風習に従つて嚴格に、清潔に、質素に、身を持するといふ習が性になつて居り、之あるが爲、彼等の大部分が貧民街に密集した生活を営み乍ら、且つ長い間、各種の危険、迫害を潜りぬけて、健康、長壽を保ち得た所以と考へられる。特別の習慣に於ては時に民族意識豊かなものを見出すのである。例へば時として見られる紙にも包まない襤褸片を露骨に家の壁にかけて、エルサレム没落の表象として臥薪嘗膽の意を忘れないが如きである。最後に彼の性格、才能として、先づ長所に聰明、忍耐力の堅固、臨機應變の才、就中、商業的才能の優秀、冒險心、奇智の豊富さがあげられ、故に政治家、發明家、探検家、實業家、學者等智的方面に多數の俊傑を出してゐる。短所としては猜疑心強く、執念深く、陰謀性に富み、革命の張本となり、利己的、口巧者、狡猾なる事等が數へられ、その犯罪も暴利誅求、詐欺、職務執行妨害、文書偽造等があげられる。

要するに猶太人は智的な民族であり、偉大な人物を輩出し、之が彼等の二千年もの長い間独自の國家を形成しなかつた事、排他的選民思想の強き宗教的信念及日常の慣習に迄浸み込んだ激しい民族意識等と結び付いて、注目すべき、恐るべき、驚くべき民族となつたものと思ふ。

一、國土計畫と交通（第一報）

川上喜代四

——二千六百年記念史學論叢に發表の豫定——

○昭和十五年七月二日(火)午後二時十五分 於實習室

出席者 (三十名)

一、地理學と辯證法

——地理論叢第十一輯に發表の豫定——

米倉二郎

○昭和十五年九月廿八日(土)午後二時半 於實習室

出席者 (二十五名)

二、二回生夏休みの收穫

(イ) 北海道旅行報告 堀川 侃

(ロ) 花蓮港築港 池田光二

(ハ) 皇民化運動 戸川俊正

一、關 柴田孝夫

(要旨缺)

○昭和十五年十月二十八日(月)午後七時 於實習室

出席者 (三十二名)

一、現下の南洋を語る

川上健三

此の夏ジャバに旅行した時、見たり聞いたりした事をそのまゝ語られた。最も興味の深かつたのは途中寄港された北ホルネオの事情で、餘り知られて居ないだけに意外に思はれた。

大會

○本年の談話會大會は種々の都合から特別に來る十二月廿一

日午後二時から樂友會館で開催せられる事となりました。
年末、學期末の事として御多忙とは存じますが振つて御参加下さいます様お願い致します。

二、教室より

○昭和十五年度講義題目

	普通講義	特殊講義	一週時間
小牧教授	地理學通論(第一部)	小牧教授	二
野滿教授	地理學通論(第二部)	小牧教授	二
小野講師	最近の探検	小野講師	二
室賀講師	地圖學特論	室賀講師	(二〇)
米倉講師	政治地理	米倉講師	二
小牧教授	東亞の聚落地理	小牧教授	(二〇)
小牧教授	地理學の諸問題	小牧教授	二
地理學實習		地理學實習	二
小野講師	Hettner, A.: Grundzüge der	小野講師	(二〇)
Länderkunde: Ausereuropäische Erdteile			一
室賀講師	L. Indochine française	室賀講師	一

○卒業生 卒業論文を提出された川上、三上、都の三君はそれ〴〵無事卒業せられた。

○豫餞會

昭和十四年卒業生三名を送る豫餞會は十五年二月九日(金)午後六時より鳥岩に於いて舉行、水たきは多少水くさかつたが、水いらずに和かな氣分の中に行はれた。出席者二十二名。

○歡迎會

五月四日午後六時半より樂友會館中食堂で二回生歡迎會を開いた。出席者二十四名、一回生の出席も數名あつて、小牧先生の訓辭、三回生西田君の歡迎の辭、二回生河地君の謝辭と型の如く行はれた後の自己紹介は愉快を極めた。散會頃に空腹を訴へる者のあつたのは別に御馳走の少なかつた爲ではなかつたらしい。

○二回生春季研究旅行

淺井、三上兩氏の御見送りをうけて小牧教授、室賀講師、野間助手、柴田、川上兩副手の御指導のもとに決行。以下報告。
五月十七日(金) 實習室で各自分擔豫備調査發表。
五月二十日(月)晴 京都驛—貴生川—信樂驛—陶器陳列館—町役場—縣立窯業試驗場—信樂驛—雲井驛—信樂宮趾—雲井驛—貴生川—拓植—伊賀上野驛—上野(友忠泊)。
五月二十一日(火)晴 上野城天主閣(郷土館)—鍵屋の辻—養蠶庵テラコッタ製造工場(目下耐火煉瓦ノミ)—上野町—伊賀上野驛(以下健脚

組)——服部——印代——一之宮——敢國神社——千歳——佐名具驛——木津——京都驛。

火鉢の産地信樂町も事變で正に轉換期にある。先づ代用品の注文が来る。信樂燒の強味である耐熱性と耐酸性が物を言ふ。代用品の代表はガスバーナーと硫酸用タンクとである。然るに業者は試験場の期待通りには従いて来ぬ。又町營窯業學校の生徒数は極めて少い。火鉢で結構儲かるし、それに高級な技術を特に要しないからである。我々の觀察ではその上生産機構が餘りにも封建的であつた。甲の生屋は昔ながらの乙の窯屋とのみ關係があり、マキ入レは完全に窯屋に隷屬し、丙の仲買は一定の窯屋以外には交渉を持たない。しかもそれ等は土地の人々だけである。兎角井蛙になり勝な山中、交通不便の位置にある。我々は町民全部が目覺めて、『地』の利を活用して國家の要求を満足させる日を待たう。

信樂宮趾、感慨深し。友忠は古風な良き宿。

小牧先生、柴田、川上兩副手、他五人健脚組は書つて村松先輩の研究された伊賀盆地の一部に歩を進めた。途中都會育ちの二回生は大いに勉強をする。又『道路に關せず南面する』家屋に注目する。伊賀一之宮參拜。如何にも一の宮らしかつた。二回生は夫々得るところあつたと信ずる。

旅行中御世話になつた公私の方に深く謝意を表して、この報告を終る。(戸川記)

〇二回生秋季旅行

本年から新體制となり、秋の旅行は提出された課題を中心に調

査を行ふ事となつた。本秋の課題は「海外移民」で十月二十五日から二十八日迄室賀講師、川上副手同伴の下に福井縣三方郡を中心に、米國移民に關する實地調査を行つた。目下その成果に就いて整理中であり、いづれ何等かの形で發表される事であらう。

〇學内開放

——昭和十五年十一月十七日——

紀元二千六百年記念事業の一つとして行はれた學内開放に本教室も陳列室を開放し、二回生諸君が親切なる解説を行つた。

〇卒業論文題目

- 一、少數民族の一地理學的考察 岡本信太郎
- 一、礪波平野の人文地理學的考察 林 宏
- 一、「日本の沿岸」(主として海村を中心として見たる) 中 田 榮 一
- 一、朝鮮米の地理學的研究 西 田 和 夫
- 一、泰國の地政學的考察 藤 野 義 明

——特に交通の問題に關れて——

〇地理論叢に就いて

地理論叢第十一輯を二千六百年記念號として發刊すべく、先に御依頼申上げました所皆様の御賛成を得、二十五篇の玉稿を載く事が出来ました。既に校正も終りましたので程なく皆様の前に御目見得する事が出来る事と存じます。

〇慰問袋發送

研究室に居る一同及學生が慰問袋を作り、去る七月下旬に土田

英夫、國領武一郎、村井敏衛の三氏に、十月下旬に下村數馬、佐伯英二、數内芳彦の三氏に送りいさゝか慰問の意を表しました。今後もひきつゞき慰問袋を作り、出征會員を慰問致したいと思つてをります。

○見 學

教室では五月二十七日宇治茶の見學を行った。また十一月一日には大津の海軍豫備航空兵團の見學を行ひ、飛行機に對する認識を深めた。

三、會員 消 息

○名簿發行後の會員移動

昭和五 増田 忠雄

昭和十一 神尾 明正

村井 敏衛

昭和十二 和田 俊二

昭和十三 西村 睦男

二回生 大田原尙清

鈴木 福一

歸還除隊さる

四、會 計 報 告

前號報告以後左の諸氏より通信費の御寄贈に預つた。

昭和十五年三月中

木村 憲治

廣瀬 淨麿

藤田 元春

田中 秀作

山崎修(二圓)

神尾 明正

下田 禮佐

今村新太郎

庄司 久孝

杉村正治郎

辻田右左男

大橋 英男

昭和十五年四月中

谷淵 梅龜

伊藤 博

三上 正利

昭和十五年九月

土田 英夫

決 算 報 告

自昭和十四年十二月六日
至昭和十五年十一月二十日

(略敬稱) (受付順)

村山 方治

小牧 實繁

島 之夫

村本 達郎

小栗田 亮

海老原治三郎

楠田 鎮雄

村上 健三

入江 久夫

岩尾 常善

淺井 得一

小野 鐵二

松下 清雄

朝永陽二郎

三溝 信雄

長谷部健史

川上喜代四

松本 博

村上 次男

岩根 保重

衆子 俊一

鈴木 福一

堀本 常雄

武 政治

次に昭和十四年十二月六日以後の會計大要を報告致します

収入		支出	
通信費	六七・〇〇 ^円	會報置並發行費	一八・四〇 ^円
談話會茶菓代	七・二〇	名簿發行費	一一・五〇
雜收	四・五五	通信費	一七・二二
前年度繰越金	三六・五八	談話會茶菓代	七・〇〇
		豫餞會寫眞代補助費	九・二〇
		雜費	一・一三

合計 一一五・三三 合計 六四・四五

差引殘高

五〇圓八八錢也

右明年へ繰越

五、おことわり

○毎年記載して居りました會員著作目錄、本年は紙節約の爲省略致しました。然し研究室には作つて置きたいと存じますので、論文御發表の節は御手数でも御通知下さいますか、別刷一部御寄贈下さいますか、お願ひ致します。

日本地政學宣言

小牧實繁著

「吾々の新日本地理は、世界の革新、世界新秩序の建設に積極的に參與する、新時代創造の計畫に方向を指示する、創造せらるべき歴史に指針を與ふる如きものでなければならぬ。」かく宣言する著者の情熱あふるゝ祖國愛の精神は天業の恢弘に翼賛し奉る、大政翼賛の大運動に一致するのみか八紘一字の精神を世界日本に具現する目的の下に流露されたる叫びでもある。

價一、五〇 送一四 四六判二二〇頁 弘文堂

(帝大新聞より)

昭和十五年十二月五日印刷
昭和十五年十二月十日發行

(非賣品)

編輯者

京都帝國大學文學部

地理學談話會

代表者

小牧實繁

印刷者

京都市下京區北小路通新町西入

須磨勘兵衛

印刷所

京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社